

風車

紀州の歴史と文化の風

埋蔵文化財と文化財建造物の情報誌

文化財センター季刊情報誌

【かざぐるま】

2011冬号

53

財団法人 和歌山県文化財センター

特集

北山廃寺、北山三嶋遺跡の発掘調査



連載

文化財建造物課短信

考古学の散歩道

「海人の世界」

きのくに歴史小話

「建築彫刻の話」

「発掘屋余話」

北山廃寺、北山三嶋遺跡の発掘調査

北山廃寺、北山三嶋遺跡は、紀の川市貴志川町北山に所在する弥生時代（約2000年前）から中世（約700年前）の遺跡です。

平成20年度と21年度の2箇年、農地整備（中山間総合整備事業）に伴う発掘調査を実施し、弥生時代の竪穴住居、古代と中世の掘立柱建物・井戸・工房・粘土採掘坑を確認するなど、大きな成果を得ています。今年度は、整備事業の工事に伴い新たに発見された文化財の記録保存作業を行いました。

今回の「風車」では、このなかで、特に注目される古代の瓦窯の調査成果を中心に、みなさんにご報告します。

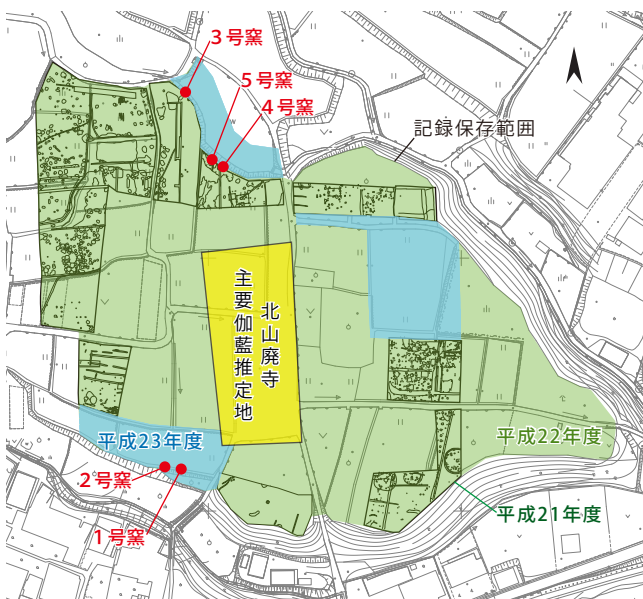
瓦窯は、遺跡の北側の斜面で3基、南側の斜面で2基を確認しました。

北側の斜面では、古代の瓦窯1基と中世の瓦窯2基が見つかりました。いずれの時期の窯も、床面が平坦な『平窯』と称されるものです。

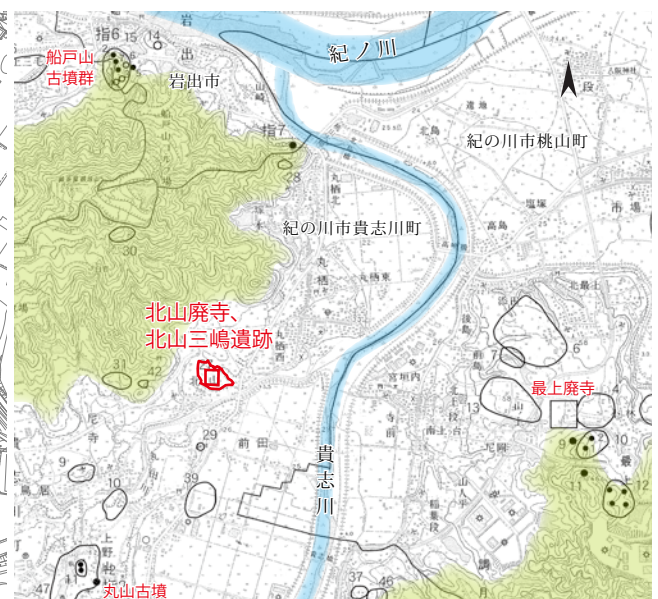
古代の瓦窯（3号窯）の残りは極

めて良く、使用することに取り壊される天井部分を除けば、ほぼ全ての部分が残っていました。瓦を焼いた場所（焼成部）や燃料である薪を燃やす場所（燃焼部）の壁は、粘土と平瓦を積み重ねて丁寧な作りあげています。炎の流れをうまく制御するため、焼成部と燃焼部との間には仕切り（隔壁）を作り、数箇所に孔（分焰孔）を開けています。また、焼成部には、分焰孔から伸びてくる炎を窯の奥まで導くために、丸瓦や平瓦を転用して5条の畦を設けていました。

この窯の特徴は、残りの良さもさることながら、2回以上の補修や改造を受けていることが判明する点です。改造により、焼成部は小さくなり、窯後に造り出された煙道は機能を失い、天井に孔を穿つものへと変化したようです。焼成部の奥壁に積まれた瓦は、焼き損じのようにも見えますが、奥壁の一部として機能していたようです。



調査位置図 S=1:3,000



遺跡位置図 S=1:50,000

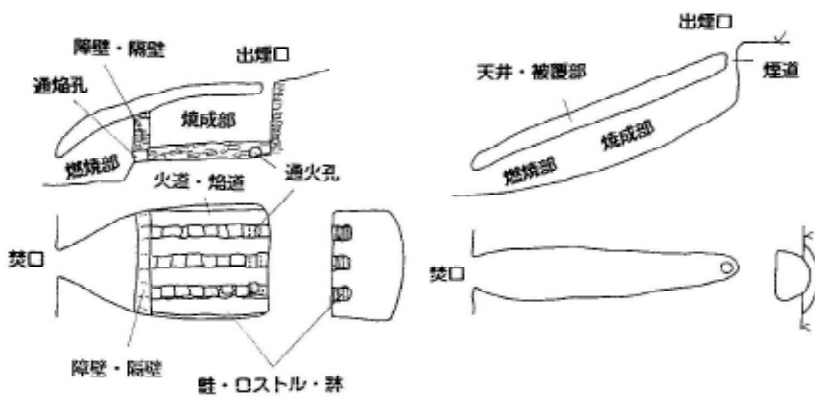


3号窯各部写真 1 全景 2 奥壁 3 側壁 4 畦と隔壁 5 焚口側からみた分焰孔 6 焚口



4号窯 (左)・5号窯 (右)

1号窯 (焚口からみる)



瓦窯構造模式図 (左：平窯 右：登窯)

「摂河泉の古代瓦窯を考える」

摂河泉文庫・摂河泉古代寺院研究会 から転載

焼成部から出土した土器や壁に使われた瓦から、8世紀代に作られ、少なくとも9世紀代までは補修や改造を受けつつ使用されたとみられます。改造を受けるたびに焼成部がだんだんと小振りなものになってゆく様子は、考古学の教科書に載っている古代の瓦窯の変遷過程そのものです。南側の斜面では、床面が傾斜する

『登窯のぼりがま(窖窯あながま)』と呼称される瓦窯が2基見つかりました。このうちの1号窯は残りが良く、焚口たきぐちを粘土と瓦で整形している様子も判明しました。瓦を焼いた後の燃え残りの炭や灰などを捨てた跡はいばら(灰原)の状況から、少なくとも三回以上は窯焚きを行っていたようです。出土した瓦からみて、北山廃寺が創建された7世紀後半代に造られた窯とみられます。

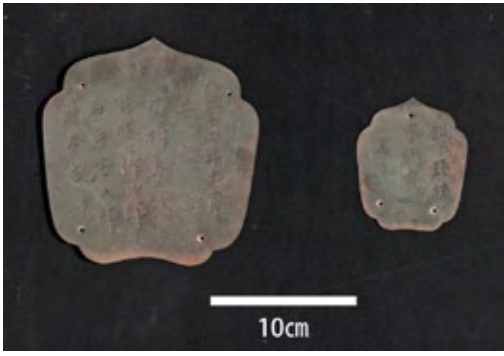
北山廃寺、北山三嶋遺跡では、これまでの調査で、古代寺院や粘土採掘坑が見つかっており、今回の瓦窯の調査により、瓦造りに必要な粘土を採取した場所(粘土採掘坑)、焼く場所(窯)、使った場所(寺院)がセットになって確認されたこととなります。

もともと、和歌山県内での瓦窯の調査例は極めて少なく、貴重な事例となりました。そのうえ、生産(瓦造り)から消費(使用)までの流れが追える事例は、全国的にみても決して多くはありません。調査に携わる者として、吹きすさぶ寒風だけでなく、掘り進める遺跡の重要さにも、身の引き締まる日々となりました。(井石好裕)

金剛三昧院客殿及び台所

金剛三昧院こんごうさんまいいんの修理工事は開始から丸三年が経過し、五年に渡る長丁場の工事も後半を迎えています。昨年のお盆明けからひわだ松皮屋根の葺き替えが本格的に始まり、現在は台所棟と玄関を葺き進めています。今回は、その過程で見つかった興味深いものを紹介します。

写真に写っている「銘板めいばん」と呼ばれる銅製の板は、玄関の箱棟はこむねという部材に付けられていましたが、見えにくい場所であつたため、今回の工事で初めて確認されました。相似形をした大小の二枚があり、表面には

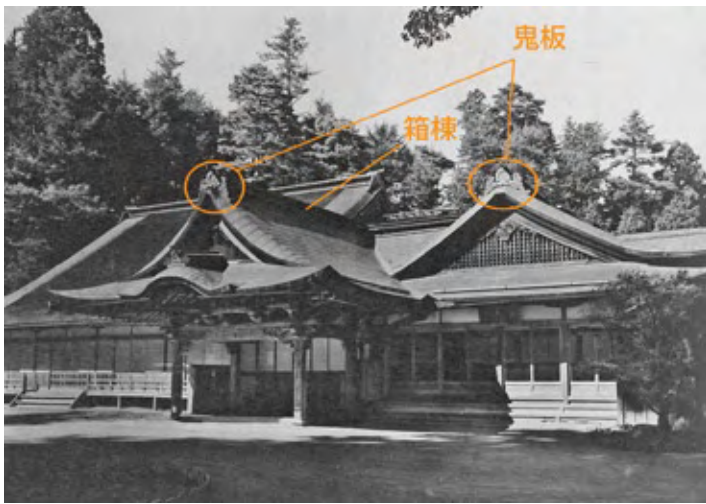


銘板 大きい方は約 15cm 程度

り、表面には文字が彫られています。「大正十四年」「銅工」「大阪」などの他に名前が記されていることから、大正十四年に客殿及び

台所の屋根が銅板葺きに変更された際に制作されたものと判明しました。

というのも、昭和四三年に現在の松皮屋根に葺き替えられる以前は銅板葺きだったことが、当時発行された「文化財修理工事報告書」の写真で判るからです。その銅板屋根を施工したのが、銘板に名前が載っている、大阪から来た富門虎造を棟梁とする五名の職人衆ということに



「文化財修理工事報告書」に掲載されている修理前写真
昭和 43 年に屋根が葺き替えられる直前の姿

なります。写真をよく見ると、銅板屋根は松皮に替わっていますが、鬼板おにいたや玄関の箱棟は当時のものが再用されていることが判ります。

大正十四年というと、現在の南海電車が高野下まで延伸された年でもありません。もちろん、高野下から山上までは徒歩。所要時間は、難波からだど五時間程だったそうです。職人さん達がこの電車に乗ったのかはわかりませんが、工事に必要な銅板などの資材も山外から持ち込んでいるはずで、こちらは索道さくどう（ロープウェイ）で運ばれたと考えられます。

高野山にも近代化の波が押し寄せたこの時期。金剛三昧院はその波に乗り、世間の耳目を集めるような、壮麗な外観を仕立てたのでしょうか。このように様々なことを考えると、大正時代に活躍した職人さん達の思いが、今も息づいているように感じられます。昭和の修理を経て残された鬼板は、現在も健全な状態を維持しており、今回の修理でも再用されることになりました。

(結城啓司)

海人の世界 — 土器製塩 —

富加見 泰彦

紀伊水道の沿岸、島嶼には 100 を超える海人の遺跡があります。海に生産の基盤を持つ海人は、豊かな水産資源を利用し、活発な製塩・漁撈活動を行ってきたことはこれまでの研究で明らかとなっています。古代では、このような海辺の民をアマと呼び、海人、漁者、白水郎などの字を用いています。

今回は製塩について述べることにします。紀伊国では、土器を使った製塩が弥生時代の終わりころから始まりました。製塩には、絶対必要な条件が二つあります。一つは海に近いこと、一つは燃料となる薪が豊富で容易に確保できることです。そのことから紀淡海峡地域では盛んに製塩が行われました。天曆四(950)年『東大寺封戸莊園并寺用帳』には「・・二百町紀伊国海部郡賀田村」の記載があり加太に東大寺の所領として二百町の「塩山」があったことがわかります。もちろん塩を産する山があるわけではなく、製塩に必要な燃料(薪)が採取できる山の意です。

海水は 4% の塩分を含み、燃料を節約するには海水の濃度を高める必要があります。この濃度を高めた海水のことを鹹水と呼びます。海藻に付着した塩分を乾燥させ、さらに海水をかけて濃度を高める方法と、ホンダワラやアマモという藻を焼いてその灰を海水と混ぜ、上澄み液を採取する方法が考えられます。『万葉集』に「朝なぎに、玉藻刈りつつ・・・、夕なぎに藻塩焼きつつ・・・」と詠われ、古代に藻塩法とよばれる方法があったことがわかります。

加太の西庄遺跡では、古墳時代の石敷き炉の上に灰層があり、灰層から丸底式の製塩土器が出土しています。このため置き火の状態ですり器製塩を行ったと考えられます。灰で保温され、安定した火力を長時間持続できる利点があります。燃料、作業などの効率面から石敷き炉が考案されたと考えています。

西庄遺跡出土の丸底式の製塩土器の容量は平均 185cc で、塩化ナトリウムの比重が 2.17g/cm³ ですから、 $185 \times 2.17 = 401.45\text{g}$ の塩が容器に入っていたと推定できます。生命維持に必要な塩分は 0.97g (1989 年厚生省統計) で、日本人の摂取量を 12.8g とすると、人工的に割り出した一日当たりの摂取量は $12.8 - 0.97 = 11.83\text{g}$ となります。これは製塩土器 1 個で約 34 人分に相当します。西庄遺跡の 1.5 × 2.3 m 規模の製塩炉で試算しますと熱効率を考えて等間隔に土器を据えたとして 54 個が可能です。一回の操業で $34 \times 54 = 1,836$ 人分の塩を採取できます。

西庄遺跡で検出した炉跡は 17 基で、炉が同時に稼働したとすると 31,212 人分を採取できる計算になります。西庄遺跡の竪穴住居は 38 棟あり、仮に 4 人家族で構成されていたとすると一回の操業で 205 日分が確保できます。夏場に 10 回操業すると 2,050 日分、実に 5.6 年分が確保できる計算になり、自村の消費量をはるかに凌ぐと考えられます。

遺跡全体の炉跡は数十基を超えると予想されます。余剰となった塩は水産加工にも使用され、塩自体が交易品として用いられたことも十分考えられます。海人にとって重要な産物であったことは明らかです。



土器製塩実験の様子

きのくに歴史小話

れきしこぼなし

建 築彫刻の話 ⑪

今年の干支にちなんで「うさぎ」の彫刻を紹介します。写真は九度山町にある、永正十四（1517）年に建立された丹生官省符神社本殿第三殿の墓又彫刻です。兎は建築彫刻の主題として意外とたくさん取り上げられています。これは全国で最古の例です。勢いよく波の上を跳びはねる兎の振り返った先に、三日月が雲間に浮かんでいます。

兎の彫刻の多くは、波と三日月が組み合わせとなつています。なぜこの三つがセットなのでしょう。満月を見ると、兎が餅つきをしている姿が見えると、子供の頃聞かされたものです。中国では、兎は月にある月宮殿で女神に使え、不老不死の妙薬を作っているとされています。『延喜式』には、白兎は「月の精、その寿千歳」とあります。

昔の人は月の満ち欠けを、命の再生の象徴と考えました。三日月はやがて満月になることを待ち望む気持ちを表しているようです。

月と兎は不老長寿を表すおめでたい意味が込められているのです。兎を波と取り合わせる意味は、実はよく分かりません。中国にこの取り合わせはないので、日本で考え出されたもののように見えます。白く砕け散る波頭は、あたかも白い兎が跳び跳ねているように見える、そんな連想から考え出されたのではないのでしょうか。ここに日本人独特の「見立て」の美意識を感じますが、いかがでしょうか。（鳴海 祥博）



丹生官省符神社本殿第三殿の墓又彫刻

発 掘屋余話 ⑪ 桃山の茶陶

中世末、その繁栄の極みにあつた根来寺が、秀吉の焼き討ちにより灰燼に帰したのは天正十三（1585）年。その後、家康の復興許可を得て本格的に山内に坊院が再興され始めるのはおそらく元和元（1615）年の頃でしょう。まさにこの間は「空白の三十年」ということが言えます。

この三十年は、わが国の窯業史にスライドさせると、ちようど志野・織部といった桃山茶陶の全盛期ですね。ともに現在の岐阜県、美濃地方で焼かれたやきものです。京都・大阪あるいは堺といった当時の大消費地ではたくさん出土するのに、根来寺ではまったくといっていいほど出ませんね。筆者の知る限り志野は一点、織部は少し多いですが、それでも十点到満たないでしょう。逆に言えばこの間、根来寺がいかに寂れていたかを傍証する遺物と言つてもいいでしょう。

志野も織部も茶の湯の世界で多く用いられたやきものです。とくに織部は、利休七哲のひとりとされる戦国の武將、古田織部がその創作に関わつたとされています。端正な形を拒み、あえて歪んだ沓茶碗にしたり、大胆に緑色の釉薬を片身がけにしたり、文様・絵付けも奔放です。

その斬新さ、奇抜さは、一見、侘び・寂びを求める茶の湯の世界と相矛盾するようですが、師の利休が、賤が苦屋に千金の馬をつないだように、茶室という静謐な空間にこの破調の美を持ち込んだのでしょうか。

それにしても筆者は長くこのやきものに親炙してきたせいか、今や茶の湯の真髄である、侘び・寂びの境地に達しています。それどころか最近では、媚びさえも――。

（村田 弘）



催し物案内

和歌山県内の文化財関係イベント情報

(財)和歌山県文化財センター <http://www.wabunse.or.jp/>

○立野遺跡現地説明会

日 時：平成 23 年 2 月 5 日（土）午後 1 時～2 時 30 分

内 容：すさみ町立野遺跡の発掘調査で、弥生時代前期の河川から豊富な土器・石器・木製品が発見されています。その調査成果を現地で紹介します。

県立紀伊風土記の丘 <http://www.kiifudoki.wakayama-c.ed.jp/>

○スポット展「初公開！古墳時代のお姫様～船戸山 3 号墳の人骨展示～」

期 間：開催中～平成 23 年 2 月 27 日（日）

内 容：岩出市船戸山 3 号墳第 3 号石室から発見された女性の人骨を展示します。

○体験教室「大日山 35 号墳の円筒埴輪をつくろう 第 8 回」

日 時：平成 23 年 2 月 5 日（土）午前 9 時 30 分～午後 4 時 30 分（要申込）

内 容：大日山 35 号墳を整備復元する際に設置する実物大の円筒埴輪を製作します。

○石室公開「大日山 35 号墳」

日 時：平成 23 年 3 月 5 日（土）午前 9 時～午後 3 時 30 分（自由見学）

内 容：両面人物埴輪などが発見された、県内最大級の前方後円墳の石室を公開します。

和歌山県立博物館 <http://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp/>

○企画展「むかしの楽器」

期 間：開催中～平成 23 年 2 月 27 日（日）

内 容：中世後期～近世に作られた和楽器を中心に、神仏に音楽を奉納したり、仏事や戦争の際に用いられたりしたさまざまな楽器を展示します。

和歌山市立博物館 <http://www.wakayama-city-museum.com/>

○冬季特別陳列「歴史を語る道具たち」

期 間：開催中～平成 23 年 3 月 6 日（日）

内 容：昔の道具にこめられた人々の生活の知恵や工夫を、実際に使われていた道具から探ります。

○コーナー展示「市内出土の銅鐸と鏡」

期 間：開催中～平成 23 年 3 月 27 日（日）

(財)和歌山県文化財センター現場事務所等一覧

【埋蔵文化財課分室】

◎和歌山市新在家 61 番地-4

TEL 073-472-3710

◎和歌山市土佐町 2 丁目 58-3

TEL 073-427-6174

【文化財建造物修理事務所】

◎金剛三昧院保存修理事務所

伊都郡高野町高野山 425

TEL 0736-56-5578

8
催し物案内

「発掘屋余話」

7
きのくに歴史小話

「建築彫刻の話」

6
連載コラム 考古学の散歩道

「海人の世界」

5
文化財建造物課 短信

「北山廃寺、北山三嶋遺跡の発掘調査」

2
特集

1
表紙 北山廃寺出土軒丸瓦

目次

風車 53 (2011 冬号)

平成 23 年 1 月 31 日発行

(財)和歌山県文化財センター

〒640-8404

和歌山市湊 571-1

TEL 073-433-3843

FAX 073-425-4595

Email maizou-1@wabunse.or.jp

URL <http://www.wabunse.or.jp>